

長岡市埋蔵文化財調査報告書

長岡城跡

－長岡駅大手口地下自転車駐車場等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010

新潟県長岡市教育委員会

長岡市埋蔵文化財調査報告書

長岡城跡

－長岡駅大手口地下自転車駐車場等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2010

新潟県長岡市教育委員会

例 言

1. 本書は、長岡市大手通1丁目地内に所在する長岡城跡（大手口地下駐輪場地区）の発掘調査報告書である。
2. 調査原因は、長岡市による長岡駅大手口地下自転車駐車場等建設工事であり、調査主体は長岡市教育委員会である。
3. 調査は、長岡市教育委員会の指導・管理の下で株式会社 吉田建設 見附支店（以下、吉田建設）が実施した。
4. 出土遺物の註記は、「NOJ-PB」とし、ほかにグリッド名・遺構名・層位等を記載した。
5. 出土品及び原図・写真類は、長岡市教育委員会が保管している。
6. 調査の体制は以下のとおりである。

調 査 主 体 長岡市教育委員会（教育長 加藤 孝博）
事 務 局 長岡市教育委員会科学博物館（館長 山屋 茂人）
調 査 担 当 長岡市教育委員会科学博物館 主任 鳥居 美栄
現 場 代 理 人 反町 嘉人（吉田建設）
調 査 員 松井 智（吉田建設）
発 掘 作 業 員 長岡市シルバー人材センター

7. 本書の執筆は、1・2を鳥居が、それ以外を松井が行った。
8. 調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する。

（敬称略 五十音順）

相羽 重徳 内山 弘 岡本 郁栄 中島 太郎 星 貴

凡 例

1. 本書における方位は磁北であり、水平基準は海拔高（m）である。
2. 公共座標は世界測地系を使用し、南北をX軸、東西をY軸とした。

目 次

挿図・挿表・写真目次

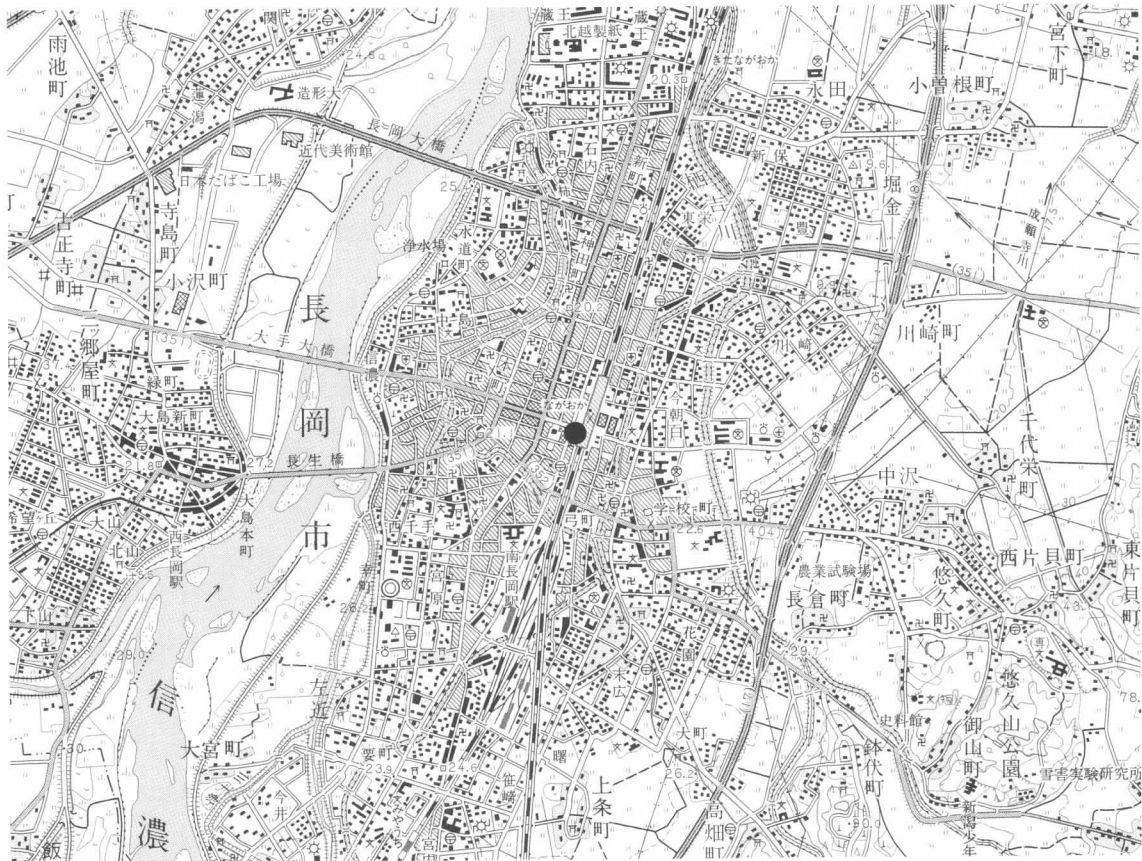
1 遺跡の概要	1	第1図 遺跡位置図	1
2 調査の経緯	3	第2図 長岡城跡の位置及び縄張図	2
3 基本層序	4	第3図 調査位置図・グリッド設定図	3
4 遺構	5	第4図 基本層序図	4
5 遺物	7	第5図 遺跡全体図	6
6 まとめ	8	第6図 井戸	6
引用・参考文献	8	第7図 出土遺物	7
		第1表 陶磁器観察表	7
		写真1 遺跡全景	
		写真2 遺構・調査風景	
		写真3 遺物	

1 遺跡の概要 (第1・2図)

長岡城跡は、新潟県長岡市内町1丁目付近に所在する近世城郭遺跡である。長岡市域のほぼ中央を信濃川が南から北へ流れており、その両岸には沖積平野が広がる。平野の東側には魚沼丘陵から延びる東山丘陵、西側には東頸城丘陵から派生する西山丘陵や河岸段丘がそれぞれ南北に走る。長岡城跡は信濃川右岸の沖積平野内に立地しており、城跡周辺の標高は約21～22m、全体的にやや平坦な地形であるが、本丸跡地であるJR長岡駅付近から城外に向けて若干傾斜している。城跡の範囲はJR長岡駅を中心とする長岡市中心街の範囲とほぼ重なっており、近代以降に進められた都市化の結果、堀や土塁などの遺構を現在の地表で確認することはできない。

信濃川両岸の丘陵や河岸段丘上には中世の山城跡などが所在し、また、河岸段丘から沖積平野にかけての地域でも中世の城館跡などが複数確認されている。長岡城の築城を始めた堀直奇が在番していた蔵王堂城跡は、信濃川右岸の沖積平野に所在する城館跡である。蔵王の周辺は中世以来、中越の政治・経済の中心的な地域であったが、信濃川に近い川欠などの水害が多かった。そのため、直奇は居城を移すことを計画し、慶長10年(1605)頃から蔵王堂城の2kmほど南東にある長岡の地に城や町を作り始めたと言われる。直奇が信州飯山へ転封になったために城作りは一時中断されるが、元和2年(1616)に直奇が長岡に戻り再開された。元和4年に直奇が本庄(村上市)に移封となった後は、代わって長岡に入った牧野忠成(初代長岡藩主)が工事を引き継ぎ、城郭と城下町を完成させた。

城は、東の栖吉川と西の信濃川を自然の外郭とし、赤川(柿川)から水を引き込んで内郭に複数の堀を巡らせる。内郭のやや東に偏った位置に本丸があり、本丸の東に詰の丸、西に二の丸、北に三の丸が配される梯郭式の縄張りである。本丸の一部に石垣を用いているほかは、土塁が内郭の各郭を囲んでいた。本

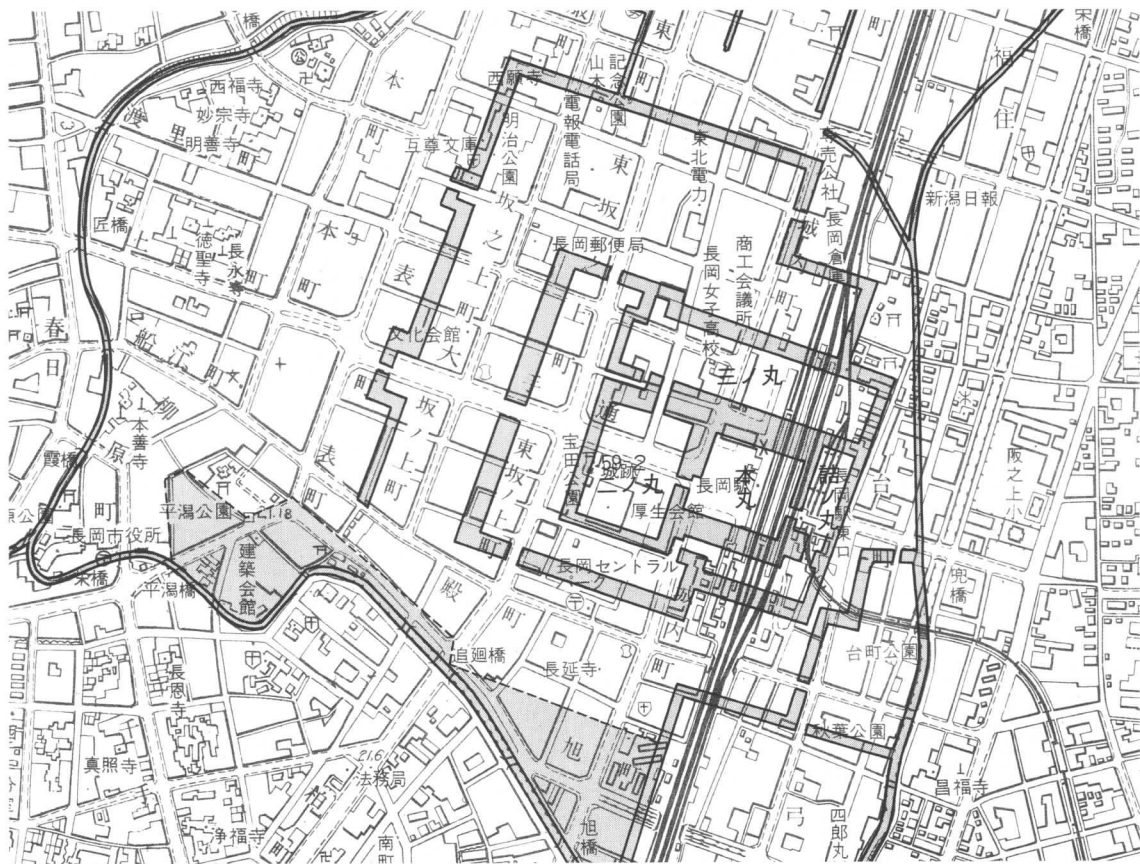


第1図 遺跡位置図 (S=1/50,000)

丸に天守閣はなく、北西に三階隅櫓、そのほかに二重櫓、多門櫓などを設けていた。二の丸には御殿と柵蔵、三の丸には武器役所と武器庫などの施設が置かれた。基本的な城下の町割は、内郭の北側に家中屋敷、西側に町屋と寺院、南側に中間町などが配置されていた。

牧野家による長岡藩政の中心地として約250年間利用された長岡城であったが、慶応4年(1868)の北越戊辰戦争によって城下町とともに焼失した。明治3年(1870)に長岡藩が廃藩となり、その後は、城跡と城下町の周辺は商工業の中心地となり、明治31年(1898)に開業した北越鉄道の長岡駅舎が本丸跡地に建設されたことにより開発がさらに進み、土塁や堀は姿を消した。さらに、第二次世界大戦時の長岡空襲からの復興に伴って都市の近代化が進められ、商業ビルなどが並ぶ市街地となった。

城跡の範囲は既に都市化が進んでおり、埋蔵文化財の発掘調査の対象となりにくい。再開発事業などによって調査や工事立会などが行われている。近代以降の開発行為により近世の遺構が残存しないことがほとんどであるが、堀跡の基底部が確認されたり、近世の遺物が出土したりすることがある。昭和52年度に新潟県教育委員会が行った長岡駅上越新幹線駅舎建設に伴う発掘調査では本丸の南堀跡などが確認され、近世陶磁器や木製品が出土している。長岡市教育委員会が行った昭和59年度の越後交通ビル建設及び大手口側バスターミナル整備に伴う調査や、昭和62年度の城内町ビル建設に伴う調査では本丸・詰の丸や三の丸周辺の堀跡、平成7・8年度の大手通り地下駐車場建設に伴う調査では二の丸の西堀跡、大手門付近の堀跡、中世の井戸跡などが確認されている。中世の井戸跡はこの丸の西堀の基底部の下から出土しており、周辺が中世の生活域であったことが確認された。平成20・21年度にはシティホール(仮称)建設事業に伴い、二の丸の西堀跡・南堀跡の一部や二の丸の南に設けられた侍屋敷地の一部などの発掘調査が行われ、堀底の土留めと見られる木杭列や侍屋敷地の井戸跡、近世陶磁器や木簡などが出土した。



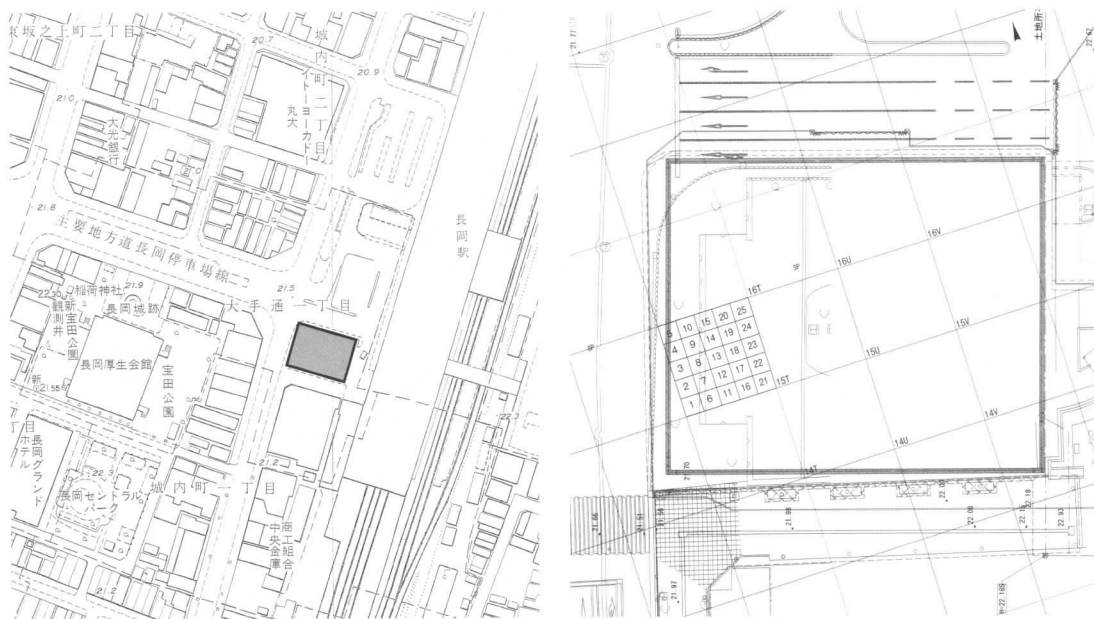
第2図 長岡城跡の位置及び縄張図 (S=1/10,000 「新潟県遺跡地図 昭和54年度版」から転載)

2 調査の経緯（第3図）

長岡市の中心市街地再整備事業の検討に伴い、JR長岡駅の西側にある大手口駅前広場の再整備が計画された。事業計画地は長岡城跡の範囲内であり、平成18年8月、事業担当課である長岡市都市整備部交通政策課（以下「事業者」という。）と長岡市教育委員会（以下「市教委」という。）は協議を開始した。計画地のうち地下自転車駐車場予定地（協議当時、自家用車整理場として利用。）については遺跡の残存状況が不明であることから、既存施設や植栽の除却工事に合わせて確認調査を実施して発掘調査の要否を判断することとし、発掘調査が必要な場合は建設工事の工程に沿う形で実施することとした。また、地下通路の改築・延伸部分やペDESTリアンデッキ計画地については工事の規模や範囲によって工事立会を行うこととし、バスターミナル部分は昭和59年度に調査済みであることから本事業に伴う調査は不要とした。

平成21年9月の除却工事に合わせて確認調査を実施したところ、本丸南堀跡の可能性が考えられる青灰色粘土を検出し、事業者と協議を行い、遺跡の記録保存のための発掘調査を行うこととなった。建設計画では既存施設除却後にソイルセメント地中連続壁の打設や掘削のための栈橋・山留工事を行い、掘削及び建設工事を進める予定であった。協議の結果、建設工事業者が遺構確認面までの路盤材や盛土の除去を行った後に市教委が現地での発掘調査を実施し、調査終了後は建設工事に支障が出ないように遺構などは埋め戻すこと、発掘残土の仮置き都合から調査地を分割して調査を進めることが決まった。

平成22年1月11日までに表土除去が終了し、翌12日から現地着手前の写真撮影など、現地における発掘調査のための諸作業を開始した。グリッドは平成20・21年度に実施したシティホール（仮称）整備事業に伴う発掘調査時のグリッド設定を利用することとし、1A（X=160440, Y=31010）を基準として、北に数字、東にアルファベットとし、両者の組み合わせで表示した。小グリッドは1～25の算用数字で表し、南西隅を1、北東隅を25とした（第3図）。降雪に備えて、調査区内に仮設屋根を設置するなどの準備作業を経て、20日から発掘作業員を投入して発掘調査を開始し、事業地の東部分から、近現代の遺物を含む層の掘削と遺構精査、遺構発掘、写真撮影などの作業を進めた。3月17日に調査区内に残っていた遺物の取上げを行って発掘作業は終了した。その後、発掘遺構などの埋戻しを行い、19日に現地を建設工事に引き渡し、また、現場事務所などを撤収して現地での作業を終了した。



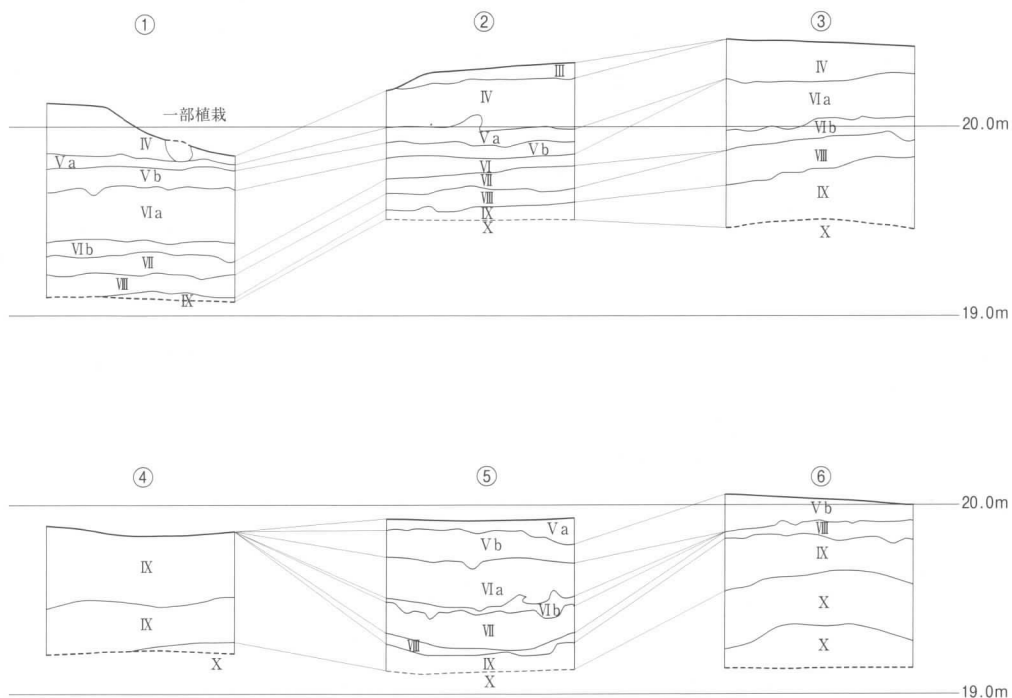
第3図 調査位置図（S=1/5,000）・グリッド設定図（S=1/800）

3 基本層序 (第4・5図・写真2-1)

調査区内の土層堆積状況を確認するため、調査区に合わせて十字にベルトとトレンチを設定、その他にもサブトレンチを設定 (第5図) した。基本層序 (第4図) は、I層が路盤材、II層が黄褐色砂の盛土、III層が黄褐色 (10YR5/6) 砂質土層で近現代の遺物を含む。IV層は灰白色 (10YR7/1) シルト (含微細砂) であり、遺構確認面である。Va層はにぶい黄橙色 (10YR7/4) 細砂、Vb層はにぶい黄橙色 (10YR7/2) シルト (含微細砂)、VIa層は黄灰色 (2.5Y6/1) シルト質粘性土であり、一部ではグライ化して灰色 (N6/) シルト質粘性土となる。VIb層は灰白色 (2.5Y7/1) シルト質粘性土、VII層はにぶい黄橙色 (10YR7/4) 細砂、VIII層は黄灰色 (2.5Y6/1) シルト+砂の互層堆積であり、一部ではグライ化して灰色 (N6/) シルト+砂となる。IX層は灰黄褐色 (10YR6/2) 砂、X層は赤褐色 (2.5YR4/6) 砂礫層であり、酸化が激しく地下水脈と考えられる。以上から、I～III層が近現代の攪乱・整地面であり、IV層が遺構確認面、V～X層が自然堆積層である。V～X層は、遺物は皆無であった。

本調査の前段階でI・II層を重機で除去し、III層は本調査で除去した。調査区の西側は攪乱や植栽があったため、遺構確認面であるIV層は削平されていたが、西端のみ確認された

基本層序の位置は、第5図中の①～⑥に対応する。基本層序の東西方向 (第4図①～③) は、ほぼ水平堆積ではあるものの、西に行くに従って低くなる傾向がみられた。また南北方向 (第4図④～⑥) は北と南に向かうに従って高くなり、調査区南端ではなだらかに下る傾向がみられた。



第4図 基本層序図

4 遺構（第5～7図・写真2・3）

今回の発掘調査では、長岡城の存在した江戸期の遺構は確認されなかった。また部分的な攪乱や駐車場建設時に掘り返された範囲については、地下深く掘られた遺構以外は検出されなかった。本遺跡で検出された遺構は、井戸（SE）10基、土壇（SK）15基、溝（SD）5条、不明遺構（SX）11基、ピット（P）55基である。これらのうち、時期の特定できる遺構は、中世の青磁が出土したSE 7、近現代の遺物の出土した井戸5基、土壇1基、溝2条、不明遺構であり、その他の遺構については遺物の出土はみられなかった。不明遺構から溶けて変形したガラス瓶や陶磁器に付着したガラス、焼けこげた礫等が散見され、第二次世界大戦の長岡空襲に関係する遺物と考えられることから、これらは廃棄土壇（ゴミ穴）と推測される。

井戸 井戸の多くは調査区の西側に多く検出された。そのうち、SE 7は中世の青磁が出土し、SE 5・8は井戸枠が検出された。SE 5・8と、近現代の木枠の集水枡と思われるSE 3、コンクリート管を使用したSE 1・2・9・10以外は全て素掘りの井戸である。井戸（除SE 3）は全てX層の砂礫層まで掘り抜かれていた。

SE 5（第5・6図・写真2-2）は14S22・23に位置する。直径1.23 m、遺構深度は2.2 mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。SD 5を切って掘られている。下部に桶状の井戸枠が検出された。上部には井戸枠に使用されたタガのみが遺存しており、井戸枠は2段の積み重ねであったことが推測される。下部の井戸枠内の埋土は最下部に植物繊維、その上位に炭・小石と砂が確認された。井桁等の設備は検出されず、砂礫層の上に桶が据えられていた。

SE 7（第5・6図・写真2-3）は16T 8・9・13・14に位置する。直径1.84 m、遺構深度は1.4 mを測り、断面形は漏斗状を呈する。1層で中世の青磁（写真3-4）が出土している。

SE 8（第5図・写真2-4）は15T 9に位置する。直径1.88 m、遺構深度は1.72 mを測り、断面形は漏斗状を呈する。下部に直径約40cmの曲物状の井戸枠が検出されたが、ほぼ粘土化していた。

土壇 土壇の大半は、井戸と同様調査区の西側に検出された。近現代の陶磁器と伊万里の染付碗（写真3-10）が出土したSK 1（第5図）以外からは遺物の出土はみられなかった。

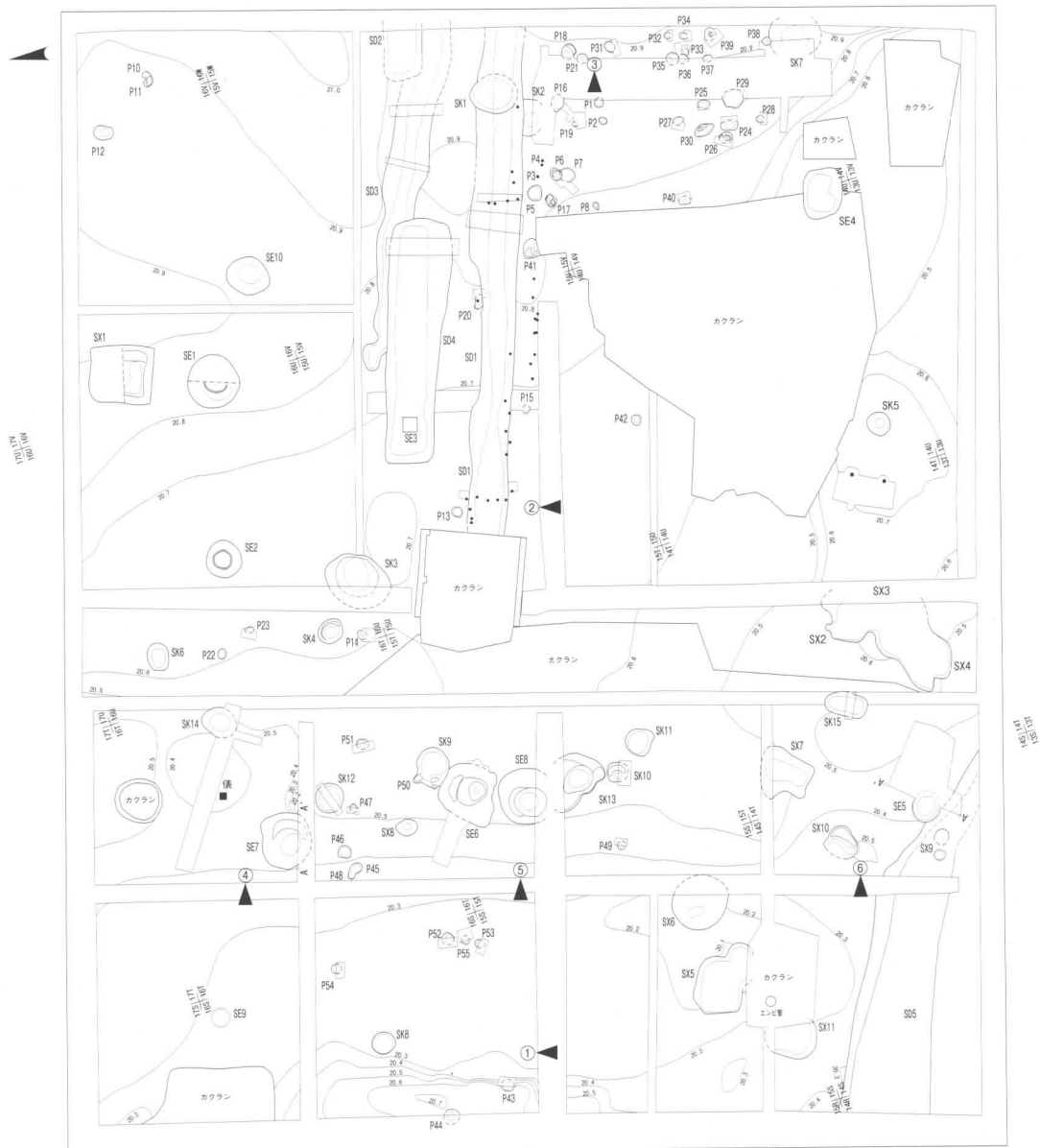
溝 溝の大半は、調査区の東側に検出された。SD 1・4からは、工業製品と思われる板状木製品が出土しており、近現代の遺構と思われる。他の溝からは遺物の出土はみられなかった。

SD 1（第5図・写真2-5）は14V-15Uに位置し、長さ17.4 m、遺構深度は1 mを測り、断面形は逆台形状を呈する。N-110°-Eの方向で調査区外へ延伸する。埋土から珠洲焼の甕（第7図2・写真3-2）・瓦（第7図12・写真3-12）が出土している。この溝の南側に杭列（第5図）があり、溝内には直交する角度で杭列が2列確認された。

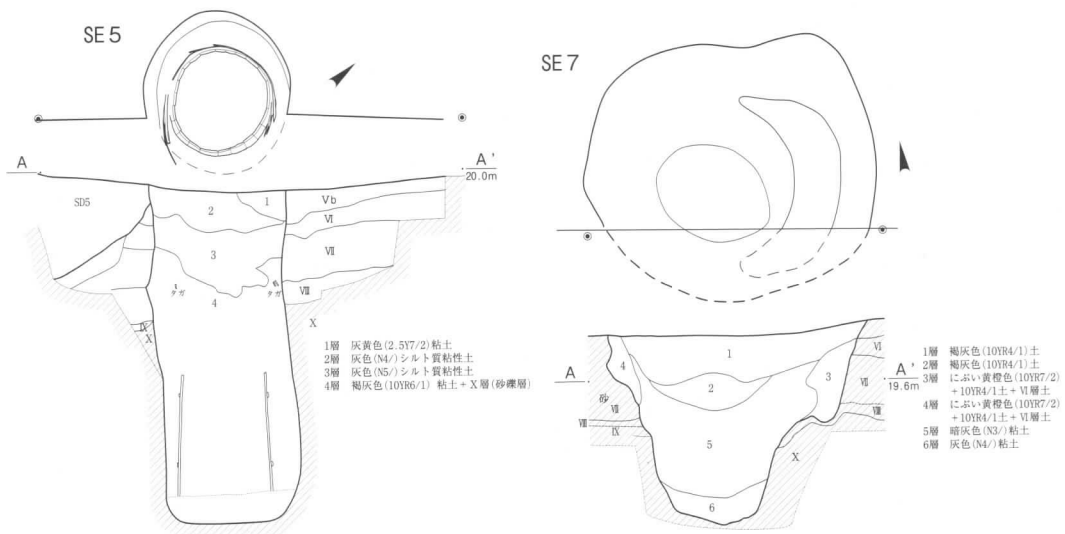
SD 5（第5図・写真2-6）は14Sに位置し、長さは10 m、遺構深度は1 mを測り、なだらかに立ち上がる。N-67°-W・N-133°-Eの方向で調査区外へ延伸する。SE 5に切られる。遺物は出土していない。検出当初は長岡城本丸の南堀跡と推測されたが、立ち上がりがなだらかなこと、遺構深度が浅いこと、また検出角度が絵図等と異なることから溝と判断した。

ピット ピットは調査区の東側に密集して検出された他は、散漫的である。P20のみ遺物が出土した。東側のピットは遺構深度が深く柱穴が推測されたが、建物として復元できなかった。

P20（第5図・写真2-7）は15U22・15V 2に位置し、直径25cm、遺構深度は35cmを測り、断面形はU字状を呈する。柱根、掘り方の側面に板状木製品、底部に小石が出土した。小石はぐり石と考えられる。このP20と対になるピットは検出されなかった。



第5図 遺跡全体図 (S=1/250) 凡例：● 杭



第6図 井戸 (S=1/50)

5 遺物 (第5・7図・写真3)

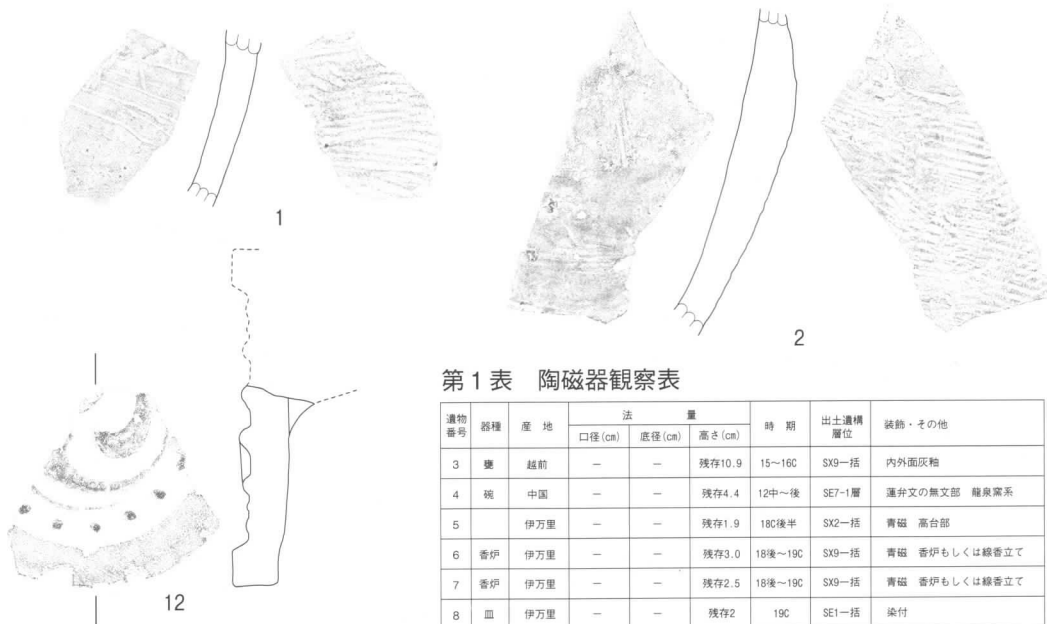
遺物は、包含層・遺構からも陶磁器が圧倒的に多く、その大半が近現代のものである。わずかではあるが中世の珠洲焼や越前焼、青磁、近世では伊万里が数点出土しているに過ぎない。近世と思われる軒丸瓦が1点出土している。また時期不明の俵が出土している。

中世 1 (第7図・写真3-1)・2 (第7図・写真3-2)とも珠洲焼の甕の胴部である。1は表面採取である。外面は並行タタキ目、内面はナデの後ハケ目調整である。2はSD 1から出土している。外面が並行タタキ目、内面は横ナデの後に縦のハケ目調整を行っている。3 (写真3-3)はSX 9から出土した甕の胴部である。内外面に灰釉が施される。15～16世紀の越前焼の可能性が考えられる。4 (写真3-4)はSE 7-1層から出土している。青磁碗の口縁部である。12世紀半ばから後半の龍泉窯系 (山本1995) と考えられる。

近世 伊万里 (5～10) (写真3-5～10) と関西系 (11) (写真3-11) の陶磁器が出土している。5はSX 2から出土した青磁の底部である。6・7はSX 9から出土した青磁の香炉もしくは線香立てであり、18世紀後半から19世紀と考えられる。8・9はSE 1から出土した染付皿であり、9の高台には「瑞」と書かれている。19世紀と考えられる。10はSK 1から出土した染付碗で、菊の花弁と氷の亀裂の絵柄から1810年代頃と考えられる (九州近世陶磁学会2000)。11はSX 5から出土した碗であり、重ね焼きの痕跡が3か所認められる。18世紀末以降の関西系窯と考えられる。

12 (第7図・写真3-12)はSD 1から出土した軒丸瓦である。推定瓦当直径は17.8cm、周縁帯の厚さは2.5cmを測る。瓦当文様は、周縁帯は無文、外区には約2cm間隔で珠文がめぐっている。内区は比較的頭部の小さい三ッ巴、尻は比較的長い。

時期不明 13 (写真3-13)は俵である。16T19 (第5図)のIV層上面で出土した。俵は円柱状の側面に当たる^{こも}菰が両端ですぼまる形態である。検出時の寸法は長辺70cm・短辺40cmである。内容物は確認できなかった。



第7図 出土遺物
(S=1/3 12: S=1/4)

第1表 陶磁器観察表

遺物番号	器種	産地	法量			時期	出土遺構層位	装飾・その他
			口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)			
3	甕	越前	-	-	残存10.9	15-16C	SX9一括	内外面灰釉
4	碗	中国	-	-	残存4.4	12中～後	SE7-1層	蓮弁文の無文部 龍泉窯系
5		伊万里	-	-	残存1.9	18C後半	SX2一括	青磁 高台部
6	香炉	伊万里	-	-	残存3.0	18後～19C	SX9一括	青磁 香炉もしくは線香立て
7	香炉	伊万里	-	-	残存2.5	18後～19C	SX9一括	青磁 香炉もしくは線香立て
8	皿	伊万里	-	-	残存2	19C	SE1一括	染付
9	皿	伊万里	-	残存3.9	-	19C	SE1一括	染付 高台に「瑞」
10	碗	伊万里	-	-	残存2.8	1810年代	SK1-1層	染付 菊の花弁・氷の亀裂
11	碗	関西系	(20)	(9)	残存6.3	18C末	SX5一括	

6 まとめ

当初の確認調査で堀を想定して調査を行い、青灰色粘土のプランが東西に延びることが確認されたため、本調査を行うこととなった。しかし本調査の段階で、面的な調査及びトレンチを設定して断面確認を行ったが、堀は確認できなかった。

青灰色粘土のプランは不定型な形で所々に検出されるのみで、IV層の一部がグライ化したことが確認された。また検出された遺構は、いずれも近現代の陶磁器やガラス等の遺物が出土しており、確実に江戸期にさかのぼる遺構は確認できなかった。わずかではあるが、中世の遺構と遺物が確認されており、長岡城築城以前の中世遺跡の存在が明らかになったのみである。

以上から、長岡城の堀はこの調査区には存在しなかった。また存在したであろう本丸関係の遺構については、近現代の攪乱によって破壊されている状況であったことがわかった。

北越戊辰戦争の後、「焼失状況を調査するに、城樓は勿論、之に附属した營造物・樓門等七十餘箇所・社殿六箇所盡く焼失して全く一物を餘さず。」(長岡市役所 1931) とあるように、長岡城の構造物はこの時に全く失われた。明治以降、長岡城廃城後の桑畑開墾、北越鉄道の長岡駅舎建設、第二次世界大戦の長岡空襲後の復興等度重なる開発によって、江戸期の遺構は完全に破壊されたと思われる。

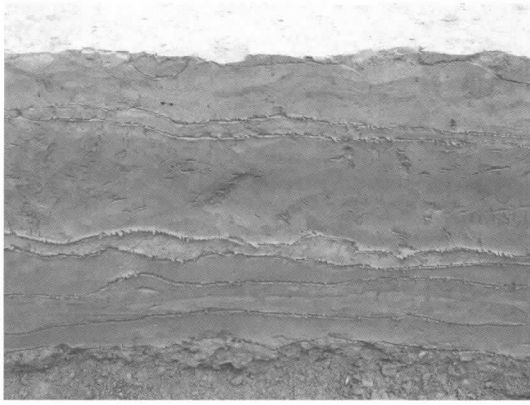
引用・参考文献

- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』 九州近世陶磁学会
- 駒形敏朗 1987 『長岡城跡発掘調査 (城内ビル)』 長岡市教育委員会
- 駒形敏朗 1997 『長岡城跡発掘調査報告書－大手通り地下駐車場建設－』 長岡市教育委員会
- 坪井利弘 1976 『日本の瓦屋根』 理工学社
- 戸根与八郎ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 41 高田城下鍋屋町遺跡』 新潟県教育委員会
- 鳥居美栄 2009 「長岡城跡 (厚生会館地区) 確認調査」・「長岡城跡 (大手通中央東地区) 確認調査」『平成 20 年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』 長岡市教育委員会
- 鳥居美栄ほか 2010 『長岡城跡 (厚生会館地区) シティホール (仮称) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 長岡市 1992 『長岡市史 資料編 1 考古』 長岡市
- 長岡市教育委員会 1985 『長岡城跡調査概報』 長岡市教育委員会
- 長岡市史編集委員会・自然地理部会 1992 『長岡の地図』 市史双書 No. 22 長岡市
- 長岡市役所 1931 『長岡市史』 長岡市役所
- 藤沢良祐ほか 2006 『江戸時代のやきもの－生産と流通－』 財団法人瀬戸市文化振興財団
- 山本信夫 1995 「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会



遺跡完掘状況（真上・手前西）

写真1 遺跡全景



1. 基本土層 (15S15) (南から)



2. SE5完掘状況 (南東から)



3. SE7完掘状況 (南から)



4. SE8井戸杵検出状況 (南から)



5. SD1完掘状況 (東から)



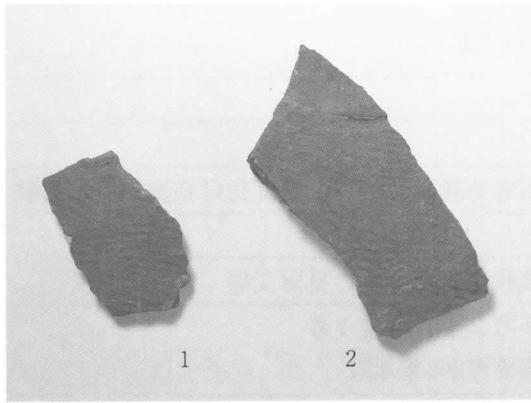
6. SD5完掘状況 (西から)



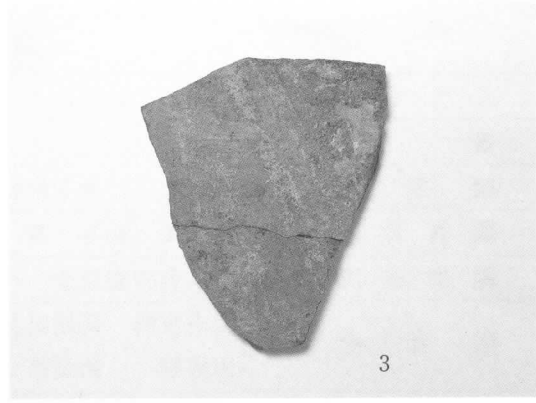
7. P20柱根出土状況 (東から)



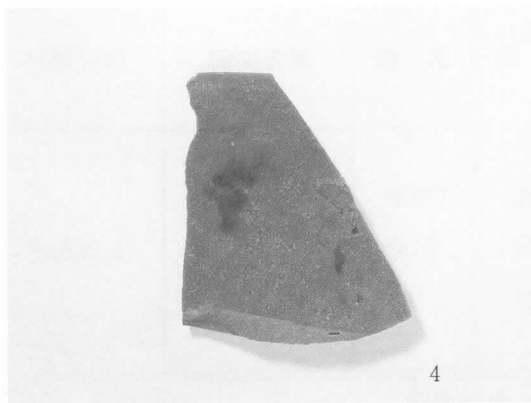
8. 発掘調査風景



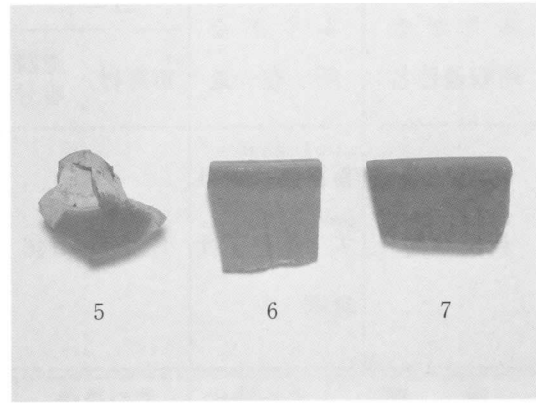
珠洲焼



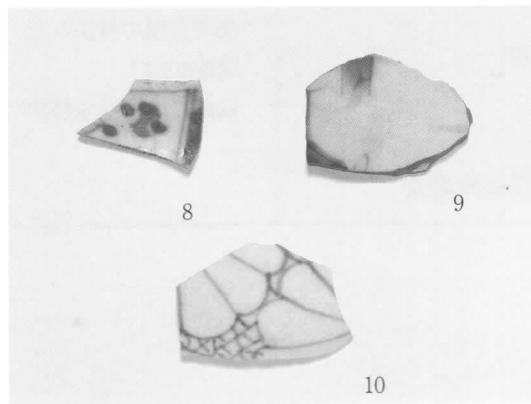
越前焼



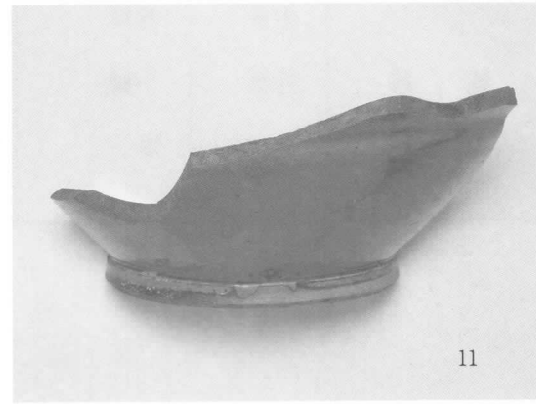
青磁



伊万里 青磁



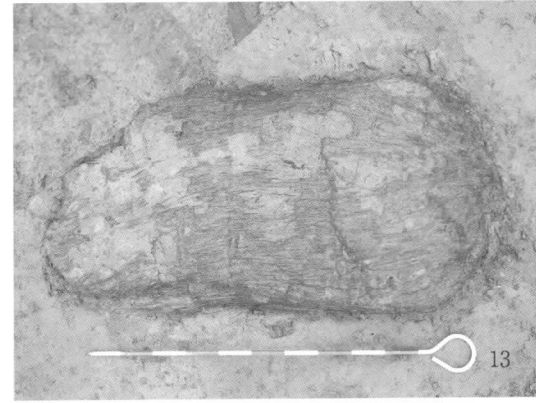
伊万里 皿・碗



関西系窯 碗



瓦



俵 (ピンポールは50cm)

報告書抄録

ふりがな	ながおかしょうあと						
書名	長岡城跡						
副書名	長岡駅大手口地下自転車駐車場等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
編著者名	鳥居美栄 松井 智						
編集機関	長岡市教育委員会 株式会社 吉田建設 見附支店						
所在地	長岡市役所 新潟県長岡市幸町2丁目1番1号 吉田建設 新潟県見附市柳橋町266番地21						
発行年月日	平成22年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
ながおかしょうあと 長岡城跡	にいがたけんながおかし 新潟県長岡市 おおてどおり 大手通1丁目 地内	15202	146	37度 26分 48秒	138度 51分 9秒	平成22年 1月20日 ～ 平成22年 3月17日	1,250㎡
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
城跡	中世 近世 近現代	井戸 土壇 溝	珠洲焼 越前焼 青磁 伊万里産陶磁器			第二次世界大戦の 長岡空襲で被災した 遺物が出土 長岡城の堀は未検出	

長岡城跡

－長岡駅大手口地下自転車駐車場等建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷 平成22(2010)年3月31日
発行 平成22(2010)年3月31日

編集機関 長岡市教育委員会・株式会社 吉田建設 見附支店
発行 長岡市教育委員会
新潟県長岡市幸町2丁目1番1号
印刷 株式会社 文化
新潟県見附市新町3丁目6番14号